
三色茶屋にて

setsuko

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三色茶屋にて

【Nコード】

N9394Z

【作者名】

setsuko

【あらすじ】

・月花道鬼流 - 他の流派と違い、血によってその力が継承される。本来なら男にしか受け継がれることのない血が、どういっわけか女に受け継がれてしまった。斎藤 咲。18歳。父方の流派の血と、母方の忍びの血を両方受継いだ為に、この先の女としての人生について苦悩する毎日。そんな中で出会った侍人。奇来 右京。二人の恋の行方を双方と周囲目線で語って行きます。

出会い　　奇来　右京　（前書き）

この作品はフィクションです。

出会い　　奇来　右京　　

今は夏・・・ではない。

しかし、背中に流れる尋常ではない・・・冷や汗。

目の前には刀をこちらに向け構える同士。こいつのこんな真面目な面は久しぶりに見る。

その更に向こう側には気絶し、地面に倒れている数名の輩。そして・・・。

自分の首元で月明かりに照らされ尚、きらりと光る・・・刃。

かろうじて視界に入る・・・人影。

はて・・・？

なぜ、このようなことになっているのか。

少し前の出来ごと。

一瞬のことで何が起こったのか、良く理解できなかったが。

- 数時間前。 -

奉行所に一通のタレこみがあった。

木野屋という呉服問屋に押し込みがあるとの内容。

しかし、タレこみのおおもとがどこからなのか不明でもあり、奉行所としては余り大きくは取り上げなかった。

ただ、何かあつてはいけないとのことで様子を見に俺と同士の山瀬が狩りだされたのだ。

お偉いさん曰く・・・お前達2人で十分だろう・・・だと。

夜ともなればこの辺は人が殆ど通ることもない。

「今日は何とも貧乏くじを引いたものですねえ。奇来さん。」

苦笑いを含んだ声で隣を歩く山瀬が愚痴を漏らした。

「ほんとだな。全く・・・。」

その愚痴には俺も同感し、溜息を漏らした。

「しかし……。山瀬さんも愚痴なんか漏らすんだな。いやあ、意外。」

「そりゃあ、ねえ。僕はもともと、こういう盗賊とか？押し込みとか？苦手だなあ。」

「よく……。言う。それだけの腕前をしておきながら……。」

「まあ……。それは否定しませんが。奇来さん、貴方には負けますよ。」

「……。そりゃ、どうも。」

お偉いさんが言った『2人で十分だろう……。』俺たちが奉行所内でも1・2を争う剣の腕の

持ち主と言われているからであるが。

「どうせ、あいつらの駒使いには変わりあるまい。」

「それを言っちゃいけませんよ……。虚しくなる……。」

山瀬はそう言ってピタッと足を止めた。

「……。ん？どうした？山瀬さん。」

「……。ん、何とも滑稽な光景ですね……。奇来さん、あれ……。」

そういつて山瀬の目配せする方へ眼を向ける。あそこは確か、木野屋……。

その正門に程近い場所。

「なんだ？ありゃ……。」

「どう見ても……。地面に寝ているのは男ですね。しかも数人。で、立っているのは……。」

「……。女子……。か。」

俺たちはゆっくりと近づいた。それに気付いたのか、女もチラッとこちらを見た。

髪は一つに束ね、どうやら袴姿のようだが、体格は小柄で女そのものだ。

ここからは暗くて顔をきちんと拝むことはできない。が、一瞬、それは光った。

「・・・はい。どうも見ても女子ですが・・・、物騒なものを手にしていますねえ。」

山瀬は女子のなりをみてクスッと笑った。

「・・・おい。・・・笑うところか？」

「だって、滑稽でしょう？どう見てもこの光景は。基本、女子は好きですが・・・。」

そう言つて山瀬は腰に手をやりながら、ゆっくりと女に向かって前進する。

女子一人に男が二人か・・・聊か気が進まず俺は止まって様子を伺う。

「こんばんわ。僕は山瀬と言います。何とも・・・穏やかな光景ではないのですが。」

「一体何があつたのでしょうか？」

山瀬はにこやかにほほ笑みながらも、冷やかな口ぶりで女子に問いかけながら徐々に

間合いを詰めていく。

問いに対して女の返答はない。その代わりにゆっくりと、こっちを正面に見据える。

そして女は前かがみの姿勢をとる。重心は・・・前足。その姿に俺は叫ぶ。

「・・・おい、山瀬っ！やめろっ！」

そういつた・・・次の瞬間だった。

そして、今に至る。

あの重心の掛け方。山瀬よりできる、そう確信した。

そして、この俺よりも。

一瞬だった。女の動きが見えなかった。

「お前・・・一体・・・。」

声を絞り出して女に問いかける。

「・・・私は・・・ただ・・・。」

女のその言葉と同時に首元の刃が喉にあたった。
触れたそこから・・・何だ？

「・・・！！？」

「どうか・・・貴方様からあの方に、刀を閉まっ頂く様お願いできませんか？」

耳元で細く綺麗な囁く声が懇願する。

「・・・。」

「お願いです・・・。私もこのようなことはしたくありません。」

「では・・・何故・・・。」

「あの方は・・・一見優しそうですが。血の気の方とお見受け致しました。」

「・・・うつ。ま、まあ。確かに・・・。」

そうだ・・・。山瀬は一見温和に見えるが・・・実はそうではない。

「ただ・・・情は厚い方の方ですので、ちょっと血の気を引かせて頂くには、

こうするのが一番かと・・・。」

「・・・参ったな・・・。」

俺は山瀬に向かってニヤッと笑う。そんな俺を見て不思議そうな表情をして首をかしげた。

「おい、山瀬さん。刀をしまっくれ。このお嬢さんはどうも俺たちをどうこうする気はないそうだ。」

「し、・・・しかしねえ・・・奇来さん・・・。」

「ああ、それにあそこに寝ている輩の仲間でもない。俺は大丈夫だから、先に奉行所に帰ってくれ。」

「ええ・・・！」

「・・・いやあ・・・頼む・・・。」

俺は真面目な顔でそう頼む。そんな俺をじっと見て何かを見取ったのか、溜息を一つ吐き、

で・・・囲まれて。刀を抜かれたものだから・・・つい・・・。「
女子は一生懸命、気絶している輩との出来事を話しているようだった。

先程の張り詰めた『気』は・・・どこに行ったのやら。同じ女子には・・・見えん。

とりあえず・・・、とりあえずだ。

「・・・まあ、落ち着け。」

「・・・はい・・・。」

俺の声に一瞬、ビクツと体を震わせたが、次第にまたシュンっとなり、女子は返事をした。

「とりあえず、まずは・・・。」

名を聞こう、と言いかけた言葉を第三者のそれも一人ではない・・・声に遮られた。

「見つけたぞつ。咲っ！」

「こんなところにいたのか。捜したぞ・・・。」

「咲い・・・なんで逃げるんだよお。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9394z/>

三色茶屋にて

2011年12月29日12時35分発行